

Title	奇形学、犯罪学、そして文学
Sub Title	La tératologie, la criminologie et la littérature.
Author	梅澤, 礼(Umezawa, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.15- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奇形学、犯罪学、そして文学

梅 澤 礼

はじめに

本稿は、2014 年度日本フランス語フランス文学会秋季大会（10 月 26 日、広島大学）において、筆者がコーディネイター兼パネリストとして企画したワークショップ「文学は知をどのように取り入れるか」における発表原稿をもとにしたものである。

ワークショップにおいては、本学文学部の小倉孝誠氏の司会のもと、ほかに近畿大学の松村博史氏が「公衆衛生学とパリへの視線」、西南学院大学の和田光昌氏が「『ブヴァールとベキュシェ』における知」というタイトルで発表された。それにより、バルザックが下水道や売春について調査した公衆衛生学者パラン＝デュ＝シャトレと同じ視線でパリを眺めていたこと、そしてフロベールが同時代の骨相学に疑念を抱きつつそれを統語論的に置き換えて作品に取り込んでいたことが明らかになった。その両氏の間で発表するにあたり、筆者は、時代としてはバルザックと同じ七月王政期を、作家としてはシューとユゴーを、しかし知としては奇形学という、骨相学とも関連する学問を取り上げた。

とはいえ本稿は、作家がどの専門書に触れ、どう作品に活かしたか、というものではない。むしろ本稿が取り上げようとするシューやユゴーはといえば、問題となっている奇形学の専門書をきちんと読んだとは、実のところ思えない。しかし作家が、学問そのものではなく、学問に対する関心やときにはステレオタイプのようなものさえも作品に反映したこと、これもまた、文学と知をめぐる研究になりうるのではないだろうか。

本稿ではまず、奇形学とは一体どのような学問だったのかについて簡単にまとめてゆく。次にその奇形学の視点が、当時同じく発達途中にあった別の学問である犯罪学にどのように取り入れられたのかを見てゆく。そしてそのうえで、シューとユゴーの作品において、奇形という現象がどのように犯罪問題と絡めて描かれているのかを考えてゆきたい。

1. 怪物学 monstruologie から奇形学 tératologie へ

怪物 *monstre* や怪物性 *monstruosité* への関心は、古代ギリシャの時代から存在していた。たとえばヒポクラテスによれば、怪物が生まれるのには次のような原因があるという。

胎児の（…）関節に相当する母胎の場所が狭かった場合、狭い中で体が動くわけであるから、胎児のその箇所が不具となってしまうのは必然である。それは土の中に十分な場所がないのに、石なり何なりに行く手を阻まれてしまった木のようなものである。木は生長するにつれてねじ曲がり、片方は太く、片方はやせ細る¹⁾。

ヒポクラテスに限らず、民衆の間でも胎児はよくチーズにたとえられていた。このたとえば、血液や精液といった液体が、肉や骨といった固体になることから来ているという。つまり母親の子宮は胎児の形を決定する型だということである。

中世に入ると、怪物はキリスト教のタブーと結び付けられた。たとえば片足をひきずる跛行 *boiteux* の子どもは、キリスト教によって禁じていられている体位、側位のせいで生まれる、といった具合である。

怪物に与えられていたこうした神の罰としての性質であるが、近世に入りようやく薄れ、怪物の原因はふたたび母親に帰せられることとなる。胎児は、

1) Hippocrate, *De la génération*, cité dans Olivier Roux, *Monstres. Une histoire générale de la tératologie des origines à nos jours*, CNRS éditions, 2008, p. 42.

妊娠中の母親の想像によりその形を左右されるという説である。この説は19世紀に入ってからもしばらく信じられ続ける²⁾。

こうした古代から19世紀初頭までの怪物に関する理論、アンリ＝ジャック・スティケールの言葉を借りれば「怪物学 monstruologie³⁾」であるが、1820年ごろ、大きな転換期を迎える。それまでのように怪物という予期せぬ現象の原因を人間の不道徳で説明するのではなく、原因を追究して回避しようとする動きが出てくるのである。たとえば1819年の医学事典では、怪物はもはや母親の子宮の形でもなければ母親の想像によるものでもなく、胎内で起こった何らかの事態によるものであると説明されている⁴⁾。

怪物に関する研究は、その後、エティエンヌ・ジョフロワ＝サンティレルとその息子イジドールによって飛躍的に発展する。とくにイジドールのほうは、1832年から37年にかけて怪物性を細かく分類し、その著作に次のようなタイトルをつけた。『人間と動物の体組織の異常の全体・個別史、もしくは奇形学理論』。古代以来の怪物学は、ここにおいて奇形学となったのである。

2) 怪物の歴史については以下を参照。George Canguilhem, « La Monstruosité et le monstrueux », dans *La Connaissance de la vie*, Vrin, 1975; Patrick Tort, « La logique du déviant », dans *Revue des sciences humaines*, n° 188, Lille, 1982; Frédéric Chauvaud, « Les Figures du monstre dans la seconde moitié du XIXe siècle », in *Ethnologie française*, n° 21(3), Presses universitaires de France, 1991; Régis Bertrand et Anne Carol (dir), *Le Monstre humain. Histoire et imaginaire*, Aix-en-Provence, Presses universitaires de Provence, 2005; A. Caiozzo et Demartini (dir), *Monstre et imaginaire sociale. Approches historiques*, Créaphis, 2008; Roux, *Op. cit.*; Didier Manuel (dir), *La Figure du monstre. Phénoménologie de la monstruosité dans l'imaginaire contemporain*, Presses universitaires de Nancy, 2009.

3) Henri-Jacques Stiker, « Monstruosité et infirmité aux XIXe et XXe siècles », in Caiozzo et Demartini, *Op. cit.*, p. 237.

4) 1819年の辞書で、怪物性の項目を担当したショシエとアドゥロンは母親の想像説を否定している。Alexandre Klein, « Le Monstre dans les dictionnaires médicaux du XIXe siècle. Essai de généalogie de la tératologie », dans Didier Manuel (dir), *Op. cit.*, p. 78.

怪物から奇形へというこの意識の転換は、1835 年、シャム双生児チャンとエンが来仏したことによって一般化された⁵⁾。たとえばシャム双生児について報道する中で、『ナショナル』紙はこうに書いている。

(…) 解剖学はこの怪物という言葉のもともとの意味を大きく広げ、今日ではこの言葉は、ある動物種の特徴をなす典型的な型からの、大きなものであれ小さなものであれ、重篤なものであれ軽いものであれ、何らかの逸脱を示すのみとなった。しかも怪物性もしくは奇形（専門用語を使わせてもらえば）のどんなに奇妙な現実すらも明らかにされ、そうした現実の特異性ないし稀な事例という分類を出て学問の分野に入ったのだ⁶⁾。

ここでは、それまで怪物、つまり人間でないとされてきたものが、実は人間の本来の型からの逸脱にすぎないのだと説明されている。そしてそのうえで、怪物という言葉は奇形という言葉で言い換えられているのである。こうして 1830 年代半ば、奇形学は一気に注目され、人々の間に広まったのだった。

2. 奇形学と犯罪学

ここでいったん奇形学から離れて、当時、人間の身体に関するほかの学問がどのように発達していたのかを見てみたい。

18 世紀半ば以降、体組織と知能の関係が注目されるようになった。たとえばペトリウス・カンペルは人間の顔面角を調べ、さまざまな人種の顔面角が、理想的な角度である 100 度とどれだけ離れているかを調べた。また、すでに名前が出たエチエンヌ・ジョフロワ＝サンティレールも、ジョルジュ・キュヴィエとともに、額の出ている民族は出ていない民族よりも知能が高いと述べている。有名なヨハン＝カスパー・ラヴァーターの観相学、そ

5) Anne-Emmanuelle Demartini, *L’Affaire Lacenaire*, Aubier, 2001, pp. 243–244.

6) *Le National*, 8 décembre 1835.

れからフランツ・ガルの骨相学もこうした中で生まれたものである。これらの学説にはそれぞれ違いはあるものの、いずれも体組織は人間の内面を示すという点において共通していた。

中でもとくに骨相学は、ガルの死後、弟子たちによって広められ、1831年にはパリ骨相学会が発足する。骨相学とは、頭蓋骨の発達部位によってその人間の性格がわかるとするものである。パリ骨相学会には犯罪問題に携わる者も多く加わり、頭蓋骨の中でもとくに犯罪者の頭蓋骨が研究対象となった⁷⁾。こうして骨相学は1830年代後半にかけて黄金期を迎える。

前述のシャム双生児が来仏し、奇形学が関心を集めたのは、ちょうどこのころのことである。犯罪の原因を犯罪者の頭蓋骨の異常に見出そうとした骨相学会員たちが、奇形というものに興味を示さないわけがなかった。骨相学会員であり監獄視察官でもあったモロー＝クリストフは、次のように書いている。

私は、身体に怪物性があるように、精神にも怪物性があると考ええる。どちらも、ほとんどの場合が先天的奇形にすぎず、治すことの不可能なものでもある⁸⁾。

一言で言えば、犯罪は精神の奇形だというわけである。リュカという、同じく骨相学会員かつ監獄視察官であった人物も、犯罪や再犯において体組織は二次的なながら役割を果たすと認めている⁹⁾。体組織の異常、すなわち身体の奇形と、犯罪、すなわち精神の奇形が、ここにおいて出会ってしまったのである。こうして犯罪は、身体の奇形を伴って現れる精神の奇形として捉えら

7) Marc Renneville, *Le Langage des crânes. Une histoire de la phrénologie*, Sanofi-Synthélabo, 2000, p. 146.

8) Louis-Mathurin Moreau-Christophe, *De la réforme des prisons en France, basée sur la doctrine du système pénal et le principe de l'isolement individuel*, Mme Huzard, 1838, p. 168.

9) Charles Lucas, *De la réforme des prisons en France*, Legrand et Descauriot, 1838, p. 40.

れるようになった。つけ加えておくと、身体の奇形と精神の奇形への注目は、やがて 1850 年代には、遺伝論を取り入れ、身体の変質と精神の変質（デジェネレサンス）理論へとたどりつくことになる¹⁰⁾。

3. 奇形学、犯罪学、そして文学

(1) シュー

シューとユゴーが作品に奇形学的視点を取り入れたのも、実はこうした犯罪者の描写においてであった。まずシューの『パリの秘密』から見てみよう。これは 1842 年から 43 年にかけて、つまり奇形学が広まってから 5 年ほどあとの作品である。この『パリの秘密』には多くの犯罪者が登場する。たとえば以下は赤腕と呼ばれる犯罪者の描写である。

小さくてか細く、ひ弱で虚弱なこの男（赤腕）は 50 歳ぐらいだった。その顔つきは貂にも鼠にも似ていた。とがった鼻、反り返った顎、骨ばった頬、よく動ききらきらと光る小さな黒い目は、その顔立ちに、悪巧み、鋭さ、頭のよさといった表情を与えていた¹¹⁾。

この赤腕は、体格こそ弱々しいものの、その顔つきは狡猾さを感じさせる。シューはこのように、犯罪の登場人物を描くとき、ほとんどいつも観相学や骨相学といった同時代の知を意識している。

では奇形学はどうかというと、それは赤腕ではなく、その息子の描写に使われているように思われる。以下は赤腕の息子が登場する場面である。

3 人（赤腕と共犯者たち）が階段の最後の一段を降りようとしたときの

10) ショーヴォーは怪物性の概念に精神医学的・人類学的概念が加わってできたものを変質だとする。またルーは、のちに変質者の特徴とされる独特の顔つきや虫歯といった特徴と怪物の特徴との類似を指摘している。Chauvaud, *Op. cit.*, pp. 244–245 ; Roux, *Op. cit.*, p. 243.

11) Eugène Sue, *Les Mystères de Paris* (1842–43), Robert Laffont, 1996, p. 136.

こと、せいぜい10歳ぐらいの、とても小さく線が細く、しかし病的で、跛行で、少し奇形の子どもが赤腕のそばに戻ってきたのだが、この子どもは赤腕の息子だとすぐにわかったくらい、驚くほどよく似ていた¹²⁾。

赤腕の息子には、父親から受け継いだ弱々しさのほかに「病的」な性質までもが加わっており、10年後に注目されることになる変質の印が刻まれている。このことは作者の観察力の鋭さを示すものであり、また変質理論に似た概念がすでに生まれつつあったことを示すものでもあるのだろう。だがいま注目すべきなのは、赤腕の息子の身体の描写である。彼は「跛行で、少し奇形」なのである。さらに次の引用を見てみよう。

栗色のズボンに、革ベルトで締められた上っ張りが、その身体障害ゆえにトルティヤールと呼ばれていたこの子どもの衣装を仕上げていた。彼は父親の隣に、沼のほとりの鷺のように、よいほうの足で立っていた¹³⁾。

ここでは、赤腕の息子がトルティヤールという名であることが明かされている。その名前のもととなった *tortiller* という動詞であるが、これはねじ曲がるという意味、正確に言えば、成長に応じてねじ曲がるという意味を持っている。さらに、引用中でトルティヤールは、沼のほとりの鷺にたとえられている。沼はしばしば貧困と犯罪の象徴として使われるが¹⁴⁾、その沼のほとりによいほうの足で立つトルティヤールは、いまにも犯罪の世界に落ちてしまう危うさを見せている。トルティヤールという名前は、彼の身体が成長に応じてねじ曲がること、そしてそれにつれて彼の精神もまたねじ曲がってゆくことを想像させるのである。身体の奇形と精神の奇形が結びつく、ここにはすでに述べたような、一般化され、犯罪と結びつけられた奇形学が反映され

12) *Ibid.*, p. 137.

13) *Ibid.*, p. 137.

14) Dominique Kalifa, *Les Bas-fonds. Histoire d'un imaginaire*, Seuil, 2013, pp. 40–43.

ていると言えるだろう。

このように考えてみると、トルティヤールの精神的奇形、すなわち犯罪傾向は、父親である赤腕と、そして誰とも知れぬ母親の悪徳を受け継いだ、先天的なもののように思われるかもしれない。しかしここで注意したいのが、トルティヤールの父親が地下で酒場を経営していたということ、そしてトルティヤールがそこに住んでいたということである。トルティヤールは地下の酒場 cave、すなわちくぼみの中で生きていたのである。作品中、トルティヤールとくぼみの結びつきは切っても切り離せないものとしてあちこちに描かれる。たとえば主人公はこのような報告を受ける。

「じつはですね、トルティヤールが、お宅の入口の向かいにある並木道のくぼみの一つに、雨宿りでもしているかのように身をこごめてスパイをしたんですよ…¹⁵⁾。」

ここではトルティヤールが、くぼみに隠れていたことが明かされている。また同じ報告者は、このときトルティヤールが別の犯罪者から指示を受けていたことを、次のように伝えている。

「そしてあの女はふたたび出てきて、縁なし帽をかぶると、トルティヤールに何か簡単に言いつけたんです。トルティヤールは自分の穴に戻りました¹⁶⁾。」

ここでもまたトルティヤールはくぼみ、ここでは穴と表現されているが、穴から出てきてまた穴の中へと戻る。別の犯罪においても、トルティヤールは「くぼんだ道 chemin creux」に身を隠している。このようにシュエは、トルティヤールがつねにくぼみや穴の中で生きていることを強調し、それが彼の身体のねじ曲がり、ひいては精神のねじ曲がりの原因であることを示唆して

15) Sue, *Op. cit.*, p. 152.

16) *Ibid.*, p. 152.

いるのである。シューがくぼみ、つまり母親の子宮の形こそが子どもを奇形にするのだという、古代の怪物性の概念を一部で抱き続けていたことがうかがえるだろう。だが母親の子宮といっても、それはもちろんトルティヤールの名も知れぬ実の母親のものではない。トルティヤールという身体的・精神的奇形児を生み出したのは、いわば社会の子宮なのである。

このようにトルティヤールの描写には、一般化され犯罪と結び付けられた奇形学の痕跡が見られた。しかしこうして犯罪がいわば先天的な奇形とみなされてゆく中で、シューはあくまでも犯罪を、社会が原因となる後天的な奇形と捉えていた。シューが奇形学を意識して描いたトルティヤールの身体と精神。それらが示していたのは、彼の奇形というよりも、むしろそうした彼を生み出した社会の奇形だったのである。

(2) ユゴー

ユゴーと怪物というテーマでは、すでに多くの研究がなされている¹⁷⁾。し

17) 『アイスランドのハン』については、Junia Barreto, « Le Monstre par-delà le Bien et le Mal », dans *Actualité de Victor Hugo. Actes du colloque Luxembourg-Vianden*, 2002 を、『笑う男』については、Michel Collot (dir), *L'Homme qui rit, ou la parole-monstre de Victor Hugo*, CDU SDES réunis, 1985 を参照。ユゴーと怪物というと、ハンの怪物的な体と心、カジモドの脊柱後彎、グウィンプレインの裂けた口が思い浮かべられる。だがハンとカジモドは奇形学が広まる前に描かれており、グウィンプレインの口は人為的に裂かれたものである。しかも『笑う男』には、グウィンプレイン以上に怪物的な人物たちが登場する。まずはバルキルフエドロと呼ばれる、策略に長けた人物である。ユゴーは彼の身体について、そのねじまがった指、平たい親指、髪の毛の多さ、殺人犯のように広くて狭い額を描写する。このバルキルフエドロは自分の女主人のもとにいと、自分が奇形 *contrefait* であると感じる。そして、せむしの男が自分を奇形 *difforme* に生んだ母親に対するような思いで彼女に仕えている。またグウィンプレインは貴族たちについて、彼らは（精神的に）奇形 *difformes* だと言っている。当のグウィンプレインとはといえば、その人面角は完璧であるとはまで書かれているのである。これらのことは、『笑う男』と怪物性ではなく、『笑う男』と奇形学に関する研究の必要性を示唆しているように思われる。

かしここでは、はじめにも述べたように、奇形という概念、それも、犯罪に関連づけられた奇形の概念に注目してゆきたい。

ユゴーの『レ・ミゼラブル』は、『パリの秘密』と同じ1840年代に書き始められた。作品中にはテナルディエやガヴローシュをはじめ、多くの犯罪者が登場する。しかしいずれも、トルティヤールのように奇形学を意識して描かれたようすは見られない。というのも、じつはユゴーが奇形にふれたのは、犯罪者の身体ではなく、その言語、つまり隠語についての考察の中だったからである。

隠語についての考察は、作品の第4部で行なわれている。まずはこの第4部の特徴から見てみたい。ユゴーはこのように書いている。

(…) 日の下に引きずり出せば汚辱をしたたらせるこのおぞましい言語を、一つひとつの言葉がまるで沈泥と暗闇に生きる怪物の汚らしい体節であるかのようなこの膿疱だらけの語彙を、社会秩序の最下層、土が終わり泥が始まる場所に探しに行き、そうしたどろどろとしたうねりの中で丹念に調べ、追いかけて、捕らえ、ぴくぴくしている状態で敷石の上に投げ出すというのは、魅力的な仕事でもなければ容易な仕事でもない¹⁸⁾。

ユゴーは隠語を知ろうと、「社会秩序の最下層、土が終わり泥がはじまるころ」へと降りてゆく。この泥という表現にも、トルティヤールと沼の関係について述べたような、貧困と犯罪のイメージが見られるだろう。そしてユゴーは、隠語をつかみあげるべく、泥、すなわち貧困と犯罪の世界を揺り動かす。こうして、それまでばらばらに描かれていた個々のミゼールは目覚め、ともに第5部のバリケードへと導かれてゆくのである。このように隠語の考察は、『レ・ミゼラブル』という作品全体においては、ひとつの要の役割を果たしているのである。

ではそうした要の部分で、奇形への関心はどのように取り入れられている

18) Victor Hugo, « Les Misères » (1848), édition critique et génétique établie par Guy Rosa, IV, 7-1.

のだろうか。ユゴーはまず、隠語の性質について説明する。

(…) 大昔の隠語も、醜く、不安げで、くだらなく、油断ならず、有毒で、残酷で、うさんくさく、下劣で、奥底にあって、宿命的な、ミゼールの言語でしかないのだ¹⁹⁾。

ここにあげられている形容詞は、みな隠語の性質を表すものである。しかし同時に、これらが隠語を話す者たちにも共通する形容詞であることがわかる。このことは以下の文章にとくに顕著である。「この言語のすべての言葉は、それを話す者たちのように、常に逃げ回っている²⁰⁾。」隠語が日々形を変えてゆくことを、ユゴーは隠語が犯罪者のように逃げ回っているのだと説明しているのである。ユゴーが隠語の精神を描くことで、間接的に犯罪者の精神を描こうとしていることがわかるだろう。

こうした隠語を擬人化して描こうとする試みの中で、ユゴーは隠語の精神だけでなく、隠語のいわば身体にもふれる。たとえば次の箇所である。「悪党には頭が二つある。行動を熟慮し生涯彼を導く頭と、死ぬ当日に肩の上に乗せている頭である²¹⁾。」これは頭を意味する隠語が二つあるということを言っているのだが、二つの頭という表現は、読者にシャム双生児のような結合双生を思い起こさせるものであり、ユゴー自身その効果を期待して書いたものと思われる。ユゴーがあげている隠語の例をもうひとつ見てみよう。それは、「*Vous iergue trouvaille bon orgue ce cigomuche ?*²²⁾」という隠語である。この隠語は、もともとは次のようなフランス語であった。「*Vous trouvez bon ce gigot ?*」ところがこれが隠語になると、一般人には理解できないように、*iergue*、*orgue*、*muche* といった、意味をなさない言葉が語尾についてくるのである。こうした語尾をひきずった隠語から、ユゴーは、隠語が跋

19) *Ibid.*, IV, 7-1.

20) *Ibid.*, IV, 7-2.

21) *Ibid.*, IV, 7-2.

22) *Ibid.*, IV, 7-2. 「この羊の腿肉はお気に召しましたかね？」という意味。

行であること、より正確に言えば、ちょうどクール・デ・ミラクル奇跡小路にたむろす犯罪者たちのように跛行を装っていることを読者に示す。ユゴーは隠語の身体を通して、間接的に犯罪者の身体を想起させているのである。

ではなぜ隠語はこのような精神と身体を有しているのか。それは隠語が、「社会秩序の最下層、土が終わり泥がはじまるところ」に生きることを余儀なくされた言語だからである。泥の中ではまわりの、そして自らの姿が見えない、だからこそ、隠語は「みにくく、不安げ」なのである。またこの泥は足にまとわりつく。だからこそ隠語は足をひきずるのである。隠語とは、暗くてねばねばした、社会の一番下にあるくぼみ、この一種母親の胎内で形作られたものにほかならないのである。この点において、ユゴーもシューと同様、怪物性の原因を子宮の形状にあるとした古代以来の怪物観を抱き続けていたと言えるだろう。だからこそユゴーは言うのである。

強調しておきたいのが、社会の奇形と身体障害を研究し、治すべく指摘するのは、選択が許されるような仕事ではない²³⁾。

ユゴーからすれば、奇形的であるのは隠語でも犯罪者でもなく、社会そのものだったのである。

隠語の考察の中で、ユゴーは隠語を擬人化し、その怪物的な精神と身体を描いた。それは間接的に犯罪者の精神と身体を描くことにもなった。しかしユゴーは、そうした隠語、ないしは犯罪者の精神や身体ではなく、社会のほうを奇形と呼んだ。シューと同様、ユゴーの作品においても、奇形の問題は個人ではなく社会の奇形を指摘するために使われていたのである。とくにユゴーの場合、隠語の考察は、すでに確認したようにそれまで個々に語られてきたミゼールをかき集めてバリエードへと駆り立てる、作品の要として機能している。その中で奇形への注目は、隠語の考察を社会の考察へと向ける、いわば要の中の要としても使われていたのである。

23) *Ibid.*, IV, 7-1.

おわりに

1830年代半ば以降、奇形学は一般化された。その奇形学の一部を犯罪学は取り入れ、犯罪者の精神と身体に見られる奇形の印を探そうとした。同じころ描かれたシューとユゴーの作品においても、奇形への関心はやはり犯罪と絡めて反映されていた。

しかし作家たちは、怪物から奇形へと概念が変化する過渡期にあった。母親の子宮が子どもを決定するという伝統的な怪物の概念を抱き続けていたシューは、犯罪者の奇形を描くことで、それを生んだ社会の奇形を告発した。またユゴーは、隠語の、そして犯罪者の身体と精神を描きながらも、最終的にはこうした隠語、そして犯罪者を存在させている社会自体を奇形と呼んだのだった。

奇形学が犯罪学と結びついたとき、犯罪は個人に原因のある、先天的なものとなった。奇形学とは、本質的には、シューやユゴーの作品とは矛盾するものだったのかもしれない。だが犯罪者個人の奇形ではなく社会の奇形を告発するために使われたことによって、奇形学の知は作品と矛盾するどころか、作者の主張を補強するとともに、作品世界により一層の空間的・時間的な深みを持たせることとなったのである。